
『異能現象』

黒猫優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『異能現象』

【Nコード】

N1922BA

【作者名】

黒猫優

【あらすじ】

未知なる『異能現象』。

『悪魔』と『天使』の言葉。

主人公『三崎良和』とそれを取り巻く。

謎、現象、恐怖、不思議。

敵と味方の区別がつかない、この場で。

主人公は何を思い何をするのか？

学園異能恋愛モノの小説。

第一幕――始まりは憂鬱の始まり――

「プロローグ」

「ただいま」

時間は5：00ちょうどだった。自分の部屋に直行する。親はリビングにも、台所にもいなかった。

「疲れたあー」

鞆を、机に投げる。ドスツ、音をたて、机に落下。

俺は自室のベッドに飛び込むように、倒れ落ちる。

「三日後は冬休みかあー、はあー」

休みには、多大な宿題がある。

そこだけは、嫌だった。面倒臭いからな

多分、冬休みの最終日に終わらせるだろう。

俺なら。ただ、それよりも嫌なことができた。

俺の名前は「三崎良和」（ミサキヨシカズ）高校二年生だ。好きな

ものはこれといってなく、

嫌いなものもこれといってない。普通で普通な一般高校生。

何故、今、疲れているか？それは、四日前に遡る話だ。

「1・画期的な世界の始まり」

あと、一週間後は冬休み。

塾と宿題のコラボレーションした地獄の始まりがあと、一週間後と
いうことだ。

はあ、と机に上半身を倒して溜め息をついた俺だった。

「溜め息ついて、どうしたの？」

そんな俺に近づいてきたのは、友達の「園田晴樹」（ソノダハルキ）
だ。

「いや、冬休みの始まりで俺は地獄に突き落とされるんだなあー、

と」

「何があつたの、良和・・・」

なんか、可哀想な目を冷ややかにされたな、今。

「塾と宿題のコラボレーションは地獄だろう？」

「それは良和が宿題を溜め込むからでしょ」

そう言いながら、晴樹は俺の前の席の奴が不在のために、椅子に座り、両足は右に向け、上半身はこちらに向けて話してくる。

「そうは言っても、宿題はしたくない」

「それだから、終わらないんだよ、良和は」

嘆息気味に言う晴樹。今は一時間目の授業がおわり、二時間目に入るところだ。

キンコンカンコーン、と間の抜けたチャイムが鳴る。

「あ、二時間目が始まる。じゃね、良和」

「おうよ。晴樹」

と、晴樹は自分の席に戻る。

俺も寝る体勢から、通常の体勢に

戻すべく、上半身を上げる

「ああ、社会か」

ハゲの社会担当の先生を見て、科目を把握する。最初から覚えとけ、と言う意見は聞かない。

引き出しから、教科書・ノートを出しつつ、

授業始まりの代名詞『起立・気を付け・礼』をする。

着席とともに、脱力感がでる。このハゲ教師

授業前に、ニュースであつた話を言うのは良いとして、自分の家の事情や学校のこと話すかな、友達みたいに。

しゃべり方がウザイが。

「おお、そうや、お前ら知つとるか？昨日、また新しい異能現象が東区で起こつたらしいぞ、知らんかったろ？」

知つとるわ。ニュースであつた。確か、第四の現象だったっけ。

「それで東区の一部が吹き飛んだそうだぞ」

ゴメン。それは知らなかった。

「あれはたまにある、風の異能現象だな。規模なら最大級だが――

残りはもちろん、聞いてなかったぜ。

『異能現象』

通常の自然災害を超える現象。第一から第五の種類に分かれる。

第一は「異状」第二は「発生」第三は「憑依」第四は「自然」第五は「明晰」

五つの現象は違う反応を示す。例えば、第四

の現象なら自然災害を究極まで極めた現象が起こる。突風・落雷・

津波・地震。様々だ。

「はあ、何を考えてんだか」

嘆息と同時に言葉を吐く。

「何を熱く考えてんだよ、俺は」

もう四時間目まで授業は終わり、昼休みだ。

弁当を机の横にかけてある鞆から取りだそうと、手を伸ばす。

「あれ？な、い？」

多分、この時間は購買部も混雑していて食い物など買える状態ではないだろう。

「今日の俺は飯なしだよ」

残念ながら、晴樹は生徒会の仕事でいない。

他クラスにまだ知り合いはいるが、多分笑って食い物をよこさない。

「はあー、しゃーねー」

仕方ない、と思い俺は食い物を諦めた。

ちよつと風に当たるか、と思い席を立つ。

ガツッ、と椅子は鈍い音を出した。

ただ、クラスの皆の声は生き生きしてた。

屋上にきた。風に当たるなら、一番の場所だ。幸い誰もいなかった。嘆息もでないまま、屋上のフェンスを背もたれにして寄りかかり、地べたに腰を下ろした。

風通しは良かった。風は俺に当たり、俺の髪を揺らす。

一切の無言だった。人はいないのだから、当たり前だが。

何となく、右を見る。右は中等部に属し、中学生がいる。だが、俺からは中等部の建物の屋上のフェンスしか見えない。中等部は高等部の真横にある。二つの建物を繋ぐように、通路が二つの建物の間にあるのだ。だが、使用されるのはあまりなく、文化祭などの物品を運ぶ時にしか使われない。

「はあ」

嘆息する。この頃のニュースでは『異能現象』の話ばかりだ。聞いてる方は疲れるのだ。

――事件の瞬間、始まった？――

屋上にいると、皆の遊ぶ声が聞こえる。

何をしているかは分からないけど、楽しそうだ。

『異能現象』――か。

ニュースを見ても分かるが、このところ現象の発生が異常に多いのだ。

魔術、超常現象、神の天罰、超能力、霊的現象。様々な言い方と様々な表し方をされる。

ただ、オカルトに変わりはなかった。

（確か、アメリカの『霊能事件』も異能現象って言われてたな）

あの事件は世界を深刻な状況にさせた。

事件内容もオカルトっぽかった。

人が精神的に壊れるのだ。『霊に憑依』されたように。狂い始め、それが感染していく。

一人、また一人と感染者が増えていった。

その感染がアジア近辺でも見られ、

人は『異能現象』の対策を本格的に始めた。

だがそれでも現象は止めきれていない。

対策後の今でも、

中国での『人滅事件』、イギリスでの『神隠し』、オーストラリアでの『自滅事件』。

と、四つの事件がもう起きている。

（そして、この日本でも）

日本でも事件は起きている。それも今。

『異色事件』

通称はそう言われる。人間が『異色の何か』を放つようになるのだ。

それは、雰囲気というより、異能とも呼べた。

”人間が『異能』になる現象”

”異能を持つ”のではなく異能現象の一部になり、人工物や人間を殺すようになる。

現象になるとは、言い方が悪いがニュースではそう言われてる。

でも、それでは『異能を持つ人間は人間ではなく、異能現象と同じなんだ』と言ってるように聞こえる。存在を否定してるように。

この学校にも事件を受けた人はいる。

数人だが、それでもいた。

異能をもった者は直ちに、監獄に連れていかれ、拘束をされる。

その後、『更正』か『処分』のどちらかに、判決は決まる。

（何を暗いことをまたもや、考えてるだよ）

今日の俺は可笑しい。頭を冷やそう。

なにも考えずに風に当たろうと、座ったまま背伸びをする。

（あ、今、背中ビキビキっていったな。これは、筋肉痛の予感だ）
良くも予感の外れ、筋肉痛には、ならなかった。

ササアー、と風が吹いてくる。

少し寒かった。

だんだん風が強くなってきた。

（ちよつと寒いな。しかたねえ、教室に戻るか）

俺は教室に帰ろうと立ち上がろうとした。

ちよつとチャイムも鳴ったところだった。

だが、立ち上がろうとした瞬間、

第二幕――開門した『死』閉門した『生』――

予感がした。そうとしか、言い様がなかった。俺は地べたに座った状態からさらに体を伏せるために上半身を右に地べたに叩きつける勢いでふった。鈍い音がしながらも、上半身は地べたにベッタリとついた。

その瞬間、ビュンツッ！という音がした。

さつきまで俺の頭の位置にあったところに『何か』が襲ってきた。

『何か』はそのまま、俺の前方にある屋上のドアへと進んでいく。そして、『何か』はドアまで斬った。『何か』はそのまま、前方に進んでいった。

俺はとっさに音のした方向である後ろを向いた。刹那、驚愕した。

「う、嘘だろ！」

『何か』は生き物ではなかった。

正体は、台風。それも『強大な鎌鼬の台風』だった。

風が吹き溢れる通常の台風とは違い、鎌鼬が台風のように吹き溢れ螺旋状になっていた。

その『台風』とはかなり距離が離れていた。

数に、何キロメートル。

それほどの距離があるのに、あの鎌鼬は鉄製のドアを切り刻んだのだ。

その瞬間、頭のなかに出た言葉があった

『異能現象』

「何で？、い、今、あ、あ」

謎が頭に浮かんた。異能現象は起きてるのに何で、『騒ぎが起きない』？

気づかないはおかしい。知らなかったはおかしい。最低でも、現象

を報せるために警報は鳴るはずだ。

だがとにかく、逃げないことには助かることはできない。

だが、ドアは破壊されている。

どうすれば？と、試行錯誤しているときに、

視界の端に何かを捉えた

ちょうど真横。右にいた。中等部の屋上。

人がいた。女の子だった。

「え。」

だが、女の子はただの女の子ではなかった。

『翼』が生えていた。真っ赤な悪魔的な翼が。女の子の背中に生えていた。

「何だよ、あれ」

小さく呟いた。すると、この言葉に反応したのか、女の子がこちらを向いた。

驚愕の顔をした。目も見開いている。

「何かを言ったようだった。必死に伝えてくるが言葉が聞き取れない。」

「どうしたの！」

「き、聞こえないよ！」

必死に伝えてくる。だが聞こえない。

その時、ドムッ！！という、大きな音がした。

音は台風から聞こえた。見てみると、

（ぼ、膨張してるッ！！）

というより、鎌鼬が螺旋状から乱れ、四方八方に飛び散ったのだ。

つまり、『こちらにも飛来してくる』

ヤバイッ！！、そう思った俺だったが。

百単位で来る鎌鼬は防ぎようも回避しようもなかった。

数百の鎌鼬が飛来してくる。

「あ、ああ。あ」

完成された『死』が俺に向かってくる。

スローモーションで『死』の塊が見える。

（死、んだ、あ。あ）

次の瞬間、『死』の塊によって、俺の体は引き裂かれた。

目が覚めた。頭がボウとしている。

白い天井らしき物が見えた。

「こ、ここは？」

口から自然と声が出た。その時、

「気がついたか」

声がした。はっ！と飛び起きる。

目の前には

「せ、先生・・・」

保健の先生の姿だった。

「何を驚いた表情で見ている」

「あ、いえ。——皆は？」

「授業中だ」

「授業中？」

大人な女性の先生『井熊冴子』（イクマサエコ）

怒れば鬼の先生だ。

「当たり前だ。お前は三時間目の授業中にぶっ倒れただろ？気を失って」

「え、三時間・・・目？」

俺はさつきまで、昼休みだったから、屋上に。わけが分からない

「まあ、取り敢えずは安静にしている」

「で、でも！——」

「している」

きつめに言われた。

「は、はい」

鬼に言われたら黙るしかないよね？
それでも、『アレ』を夢とは思えなかった。

「2．もう始まったよ、絶望は」

一時間、保健で寝たら気分が全快した。

なので、五時間目から俺はまた、授業に入ることにした。
自分の教室に到着する。ドアを開ける。

「お、遅れました」

声音に若干の緊張が入ってしまう。

相手は国語の先生『信楽立麻』（シガラタツマ）

男の先生だ。怖くはない。ただ、何故かこの先生には緊張が走る。

「ああ、良和君ですか、体は大丈夫なので？」

「はい。気分は全快です」

「そうですか。今は古典の勉強です。席について、教科書の50ページを開きなさい」

「はい、ありがとうございます」

イケメンな所も苦手だ。

そうも言いつつ、俺は席に着く。

（あれは夢だったのかなあー）

頭のなかで、考えが蹂躪する。

グルグルと回ってもきた。考えがまとまらない。

（本当に、夢？）

結局、授業は頭に入らなかった。

— 考え中の苦悩、日常の平和 —

そのまま、授業は進んでいった。
六時間目は数学だった。

「え、この式は——」

真面目に聞く気はなかった。
ってか、聞けなかった。

頭には、二つの言葉が巡っていた

（『夢』と『真紅の翼』——か）

例え、夢だったとしても何故か気になる
数学の授業も頭にはいつてきなさそうだ。
俺はそのまま、授業放棄をしていた。

「4・ちよつとした日常のアレ」

そのまま、授業は終わった。

下校の準備と帰りの会がまだ残っている。

俺は机の横に掛けてある、鞆をとった。

そして、机の引き出しの中にある

教科書・ノート・筆箱・本を出そうとした。

が——

（——あれ？）

教科書がなかった。ノートもなかった。

筆箱もなかった。本もなかった。

あったのは、

（これは——羽？）

それは真紅の羽だった。あの時の、女の子にあった翼の羽の一部の

ような感覚がした。

だけど、血のついた羽にも見えた。

ともあれ、教科書やら、何やらは見つかった。

（まさか、靴箱の中とはな）

”苛め”と思うかもしれないが、俺には違う気がした。

「あ、そうだ。」

俺は鞆から紙を出す。一枚の紙だった。

普通にノートの切れ端だ。定規を使ったのか、切り口は綺麗だった。

「今日はここか」

この手紙は、待ち合わせの場所を書いたものだ。

（『アイツ』もよくするよ）

アイツとは幼馴染みのことだ。

俺は若干、急いで歩いていた。教科書・ノートを探すのに時間がかかったために、下校時刻、ギリギリなのだ。

（『この紙』を見る限り、2・3の教室か）

俺は通り過ぎるクラスの中の壁に掛けてある時計に目を向けた。

（やべえ、時間が！）

俺はあと少しで下校時刻になる時計を見て、慌てて走った。

2・3の教室は三階にある。俺は今、一階だった。階段の角に差し掛かった。このまま、前にいって、右に階段がある。角になってるので、階段の様子は分からない。

（よし、この階段を三階まで一気に上れば2・3はもうすぐだ）

階段を上ろうと角で右を向いた瞬間。

ドッ！と、俺は『誰か』にぶつかった。

「きゃー！」

「うわあ！」

二人して後ろに倒れた。

「いててて、あ、すいません！」

「いたたあ、あ、はいー！」

俺は立ち直しながら、『誰か』を見た。

その人は

「あ！一葉！」

二人とも立ち上がり終わった。

「あれ？良和君だ。お久しぶりだね」

ウチの学校の生徒会長だった。

名前は『干野一葉』（ほしのかずは）

俺の家のお隣に去年、引っ越してきた。

「久しぶりって、今日も仕事か？」

「うん。もうすぐ体育祭でしょ？その用意をね」

「ふうん、そうか」

「ふうんって。あ、良和君は何してるの？」

その時、俺は元々の目的を思い出した。

「あ！そうだった！俺、2-3に行かなきゃだった！」

「2-3？・・・もしかして、幼馴染みさんと一緒に帰るの？」

「ああ、そうだぜ——って、一葉さん？」

へえー、そうなんだー、と何故か暗黒のオーラを出しながら、光を失った目で俺を見ていた。

何となく、怖かったので、早く行くことにした。

「じ、じゃあな！一葉！俺！急いでるから！」

なおも一葉の目は怖い。

「はあーい。幼馴染みさんによろしくねえー」

俺は慌てて駆け出した。

2-3 に到着した。もう下校時刻は10分を過ぎていた。

「おーい。雅美、帰るぞ」

席についていた、俺の幼馴染みに声をかける。

「あ！遅いよ！カッズー！」

こちらに振り返り、陽気に声を返してくる。

「遅い、て。お前があんな面倒に待ち合わせるからだろ？」

シユタ、と立ち上がり、

「女の子はあんなロマンチックが大好きなんだよ！」

エッヘン気味に、胸を張る。

『八島雅美』（ヤシママミ）。俺の小さい頃からの幼馴染みだ。
一葉よりも、俺との友達付き合いが長い。
「はいはい。帰るぞ、雅美」
「はいだよ！カッズー！」

——秘密の秘密は困惑の証——

何はともあれ、雅美と二人で下校中である。

「考え事？ カッズー？」

「う？ あ、ああ。 まあな」

クラスが違ったため、あまり学校では話さないが大抵は登校・下校は一緒である。

「カッズー、考え事は頭に悪いよぉ」

「それを言うなら」 体に「だろ？」

「そうでしたあゝ！ うっかり！」

「はいはい」

”体に”でもおかしいけどな。

明るく陽気。それが俺の幼馴染みの特徴であり、長所だった。

その性格だからこそ、友達も多く、人望も厚かった。

（俺とは真逆だな）

根暗な俺とは違っていた。

妬ましくもあるが、誇らしい気持ちの方が大きい。俺にとっては雅美は妹みたいな存在だった。

（態度とか、話し方とか、な）

昔は雅美が俺に頼ってきたのに。今ではその真逆だ。俺が雅美に頼りつきりだ。

「で、カッズーは何をお悩みで？」

「世界の不思議について」

「ほ？」

あながち、間違っではないはずだ。

「まあ雅美の頭じゃあ、分からないよ」

「ぷうう！ カッズーのケチ助！」

子供みたい。これ、禁句。

「はいはい。 悩み相談はまた——」

——今度で、と言うつもりだった。

だがそんなことよりも由々しき事態が起きた。

（あの子——だ）

さっきの夢（？）に出た、あの子だった。

赤い翼を背中から生やしていた。あの子だった。だが、見た目は同じなのに、翼はなかった。

それでも俺の脚は勝手に動いた。走ってすらいた。

「雅美、先に帰ってて！」

「え！で、でもさ！」

「いいから！先に帰ってて！」

「うう、早めに帰ってよ！」

そんなに遠くない距離なのに大声の俺ら。

走っていくと容易にその少女の元に着いた。

背後からなので、声をかける。

「あ、あの！」

「？」

少女がこちらを振り返る。

「君さ！さっきの——」

「『どちら様』ですか？」

どちら様、つまり俺とは面識がない。

——いや、待てよ。屋上での距離。

しかも、異能現象まで合ったんだ。

顔が見かった可能性もある。

「ほら、さっき屋上にいた、俺だよ」

自分の顔に指を差して少女の反応を待つ。

「——屋上？」

「そ、そうだよ！」

探るような、疑るような、目を向けてくる。

「貴方は、屋上の『アレ』を覚えてると？」

アレ、とは異能現象が起きたときの屋上なのか？ならば、

「ああ、覚えてるぜ」

俺は答えた。

「——ッ！それは！本当なの！？」

大声で少女は答えた。

俺、どころか周りの奴らも驚いた。

「いや、どうしたの？」

制服から見るに中等部の子だろう。

ダンッ！、と俺の胸を叩く。

「だから！貴方は『私に分かるの！？』」

何を言ってるのかが分からなかった。

その時、

「ね、ねえ？」

背後から肩を軽く叩かれる。

俺は声に反応して振り向いた。

「えつと、何？」

知らない人だったが、同じ高等部の人だった。

「君はさ、『一人で誰と話してるの？』」

はあ？、と思った。

目の前の女の子が分からないのか？、と。

「いや、俺の目の前に女の子がいるじゃん！」

「え？えと、僕には見えないな、ハハ」

苦笑気味に言われた。

だが、苦笑はどうでも良かった。

コイツには、いや、”俺以外には”この子は見えていない——の
か。

驚愕というより、信じられないというのが
心境だった。

「じゃあ、僕はちよつと、な」

なにも言わず固まっている、俺を見越して
どこかへと行く誰かだった。

俺は俺の胸に寄りかかって泣きそうな女の子を見ていった。

「君は——まさか」

「はい、私は、」

——異色者です——

俺の耳に女の子の声が響いた。

— 孤独な女の子の独り言・2 —

『私は分からない』『猫さん、可愛い』『今見てみた』『気分が悪い』『頭がいたい』『目がかすれる』『テレビ見る?』『一人で見る?』『一人は嫌だよ』『嫌!』『キツイ』『苦しい』『壊れる』『崩れちゃう』『大嫌い』『犬は嫌い』『女の子なの?』『ヤダア、』
『『一人はイヤだあ!』『』』

女の子の声が世界に反響した。

だが、結局は『こだま』しかせず、
誰にも聞かれなかった。

いや、一人には聞こえていたかもしれない
それが誰かは分からないが——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922ba/>

『異能現象』

2012年1月8日03時46分発行